

教育と進路にみる学群・学類の多様性と固有性

吉本, 圭一
放送教育開発センター : 助教授

<https://hdl.handle.net/2324/18794>

出版情報 : 筑波大学の新発展のための方策に関する調査研究, pp.111-126, 1995-07-03. 筑波大学の新発展のための方策に関する調査研究会
バージョン :
権利関係 :



教育と進路にみる学群・学類の多様性と固有性

吉本 圭一

はじめに

筑波大学の学群－学系組織は、教員の組織としてユニークであり、組織運営面からも伝統的な学部組織との比較・評価が有意義である。同時に、それは学生に対する教育組織としてもユニークであり、学士課程における学群・学類制度、学士課程・修士課程・博士課程の相互の独立性など、学生の教育面から評価していくことは、ひとり筑波大学の発展のみならず、設置基準大綱化以後に改革の進みつつある全国大学の方向性の検討のためにも重要である。

例えば、筑波大学の学群－学系－研究科の組織的な相互独立という試みは、今日の国立大学の多くで志向されている大学院の部局化、いわゆる「大学院重点化」の先行実験例ともいえる。すなわち、新構想大学としての筑波大学の試みの多くは、今日の大学改革の方向を検討する上で先取りしているという位置づけをしてみるとことができ、その20年の経験の評価してみることは、現在進行している学士課程組織の改革などの今後の課題を検討するうえで有意義である。

本章では、1994年度の筑波大学における学士課程学生の科目履修構造を学群・学類ごとに比較するとともに、1993年度学士課程卒業者の大学院進学動向および就職動向から学群・学類の特徴を比較検討してみたい。

第1節 高等教育カリキュラムからみた学群・学類制度

(1) 学群と学際性

高等教育カリキュラムにおいては、当然のことながらその「幅」と「深さ」のバランスが要求される。旧設置基準においては、一般教育と専門教育などの科目区分があり、それぞれ一般教育が「幅」を、専門教育が「深さ」をおもに代表する区分であった。しかし、専門分野をもとに組織された学部においては、一般教育は専門教育と比較して相対的に軽視される傾向がある。一般教育委員会や教養部等の一般教育組織において、形式上、一般教育は専門教育との関連において議論され、一般教育課程として編成されていたはずである。しかし、制度的に教員・学生の組織上において、またカリキュラム編成において専門

課程と分離されることで、一般教育を通してのカリキュラムの幅の広さが、さまざまな専門へ進んでからのカリキュラムの深さと適切に関連するよう組織されたいのかどうか、疑わしい。

高等教育カリキュラムの面からみると、筑波大学の学群制度は、学部という教員の学問領域の枠組みに拘束される制度と異なり、学生に幅広いカリキュラム選択ができるように組織されている。新構想を議論している段階では、第1群から第3群までをすべて包含した総合的な学群を主張する関係者もあったが、管理運営上の規模の点から3つの学群が組織され、それぞれに文科系的な学類と理科系的な学類が配置されたわけである。

これに対して、東京大学の教養学部や広島大学の総合科学部などは、一般教育組織を母胎としつつ、その専門教育と分離されていることの制度的な問題を意識しつつ、相対的に小さな専門課程を一般教育課程と接続するように組織されており、その専門教育においても学生の学習における幅広さを期待し、教養教育のモデルを開拓してきた。筑波大学もまた、第1学群から第3学群まで、それぞれに文科系的な学類と理科系的な学類とをともに有し、学類をこえて、さらには学群を越えてカリキュラムを幅広く選択できるように企画されており、上述の大学とは別の形態で教養教育型の教育理念を探求してきたといえよう。

ところで新制大学発足から今日までに登場してきた大学の学部名称（筑波大学の学群名称を含めて）をたどってみると、表1のようになっている。すなわち、1950年の新制大学発足期には46種類の学部名称であったものが、1983年まで、1970年代半ばの筑波大学の6つの学群の登場（1974年から77年にかけて）を含めても、年平均でほとんど1、2種類ずつ新しい名称が追加されるにとどまっていた。これに対して、1986年以降学部名称は飛躍的に増加しつつある。ことに93、94年にはそれぞれ10種類以上の学部名称が追加されて、1994年現在までに累計で142種類が出現したことになる。学士課程教育は今日急速に多様化しつつあり、新しく登場しつつある学部名称を一見して明らかなことは、「国際」「人間」「環境」「情報」などのキーワードを組み合わせた学部名称が増加していることである。

「人間」が1972年の人間科学部からスタートし、「環境」は1978年環境保健学部から、「情報」と「国際」はそれぞれ1979年の環境情報学部と国際学部がその始まりであるが、筑波大学もほとんど同じ時期に設置され、学群内にすでにそれらの要素を学類という下位要素として含んでおり、カリキュラムに関するこれらの新しい学部と共通の学際性の発想を強く持っていたのである。

すなわち、専門分野を幅広く包含するようないわゆる学際型学部が増加しているのである。筑波大学も含めて20年程度先行する教養系学部等組織は、今日の学際型学部組織およびそこで期待される新しい教養教育を展開するためのカリキュラム編成のモデルとして評価されうる。

また、筑波大学の学群のカリキュラムの実態を検討することで、学部型教育との制度組

表1 新制大学におけるさまざまな学部名称の登場年

文学部	50	社会科学部	51	国際学部	86
神学部	50	法商学部	51	比較文化学部	87
仏教学部	50	獣医学部	51	情報工学部	87
外国語学部	50	商船学部	51	食品栄養科学部	87
人文学部	50	文教育学部	51	人間関係学部	87
社会学部	50	文商学部	51	国際文化学部	88
法学部	50	農獣医学部	52	現代文化学部	88
法経学部	50	文芸学部	52	行政社会学部	88
政経学部	50	美術工芸学部	55	生物資源学部	88
政治経済学部	50	社会福祉学部	57	経済情報学部	89
経済学部	50	文経学部	59	国際商学部	89
経営学部	50	酪農学部	60	生物産業学部	89
商学部	50	基礎工学部	61	情報科学部	90
商経学部	50	海洋学部	62	造形芸術学部	90
法学社会学部	50	造形学部	62	総合政策学部	90
政治学部	50	衛生学部	62	環境情報学部	90
理学部	50	衛生看護学部	64	人間社会学部	90
工学部	50	産業社会学部	65	生命理工学部	90
工芸学部	50	栄養学部	65	社会情報学部	91
電気通信学部	50	生産工学部	66	医用工学部	91
鉱山学部	50	芸術工学部	68	システム工学部	91
農学部	50	人間科学部	72	開発工学部	91
園芸学部	50	保健学部	72	保健衛生学部	91
獣医畜産学部	50	医学専門学群	74	医療福祉学部	91
畜産学部	50	体育専門学群	74	医療技術学部	91
水産学部	50	総合科学部	74	日本文化学部	92
水畜産学部	50	第一学群	74	国際経済学部	92
繊維学部	50	看護学部	75	デザイン工学部	92
医学部	50	生活科学部	75	人間生活学部	92
歯学部	50	芸術専門学群	75	不動産学部	92
薬学部	50	第二学群	75	人間学部	92
家政学部	50	第三学群	77	経営経済学部	93
教育学部	50	人文社会科学部	77	発達科学部	93
体育学部	50	環境保健学部	78	スポーツ健康科学部	93
芸術学部	50	学校教育学部	78	人文・社会学部	93
美術学部	50	経営情報学部	79	生物理工学部	93
音楽学部	50	生物生産学部	79	看護福祉学部	93
文理学部	50	国際関係学部	79	環境学部	93
教養学部	50	情報学部	80	デザイン学部	93
学芸学部	50	図書館情報学部	80	総合人間学部	93
法文学部	50	国際言語文化学部	82	保健福祉学部	93
理工学部	50	国際政治経済学部	82	保健医療学部	93
文家政学部	50	鍼灸学部	83	生活環境学部	94
文経学部	50			流通科学部	94
文政学部	50			総合情報学部	94
理家政学部	50			経営科学部	94
				情報文化学部	94
				政策科学部	94
				総合管理学部	94
				国際経営学部	94
				文化情報学部	94
				コンピュータ理工学部	94
				生命科学部	94

組織的な比較枠組みを検討することができるだろう。学部型組織においては、学問研究の展開や専門の分化にに応じて教員の組織が構成され、それをもとに専門的な領域、つまり教員の思考枠組みに応じた学士課程教育がなされる。これに対して、学際性を強調するばかりには、一方には学問分野が境界領域で発達していることに対応する細分化の志向とともに、他方で、そうした境界領域を核として、幅広い分野をカバーするという総合化の志向がある。学生はそうした学際型の学士課程教育においては、教員が設定した学問的思考枠組みにとらわれずに多様な選択が可能になるはずである。そして、そうした組織が教員の所属組織と分離されたときに、そうした学生の主体的な選択の基盤はより一層大きくなるはずである。

さて、実際にそうした学際型カリキュラムの理念はどのように実現されているのだろうか。本章では、第1に、筑波大学の学士課程教育における学群・学類組織の特色を、具体的な学生の履修科目構造を比較分析することで検討してみたい。また、第2に、学類単位での履修科目の幅広さがあれば、それは、その後の卒業者の進学や就職のパターンとも関連しているはずである。つまり、学群内でも多様な進路パターンがあり、学群間で類似のパターンが見られるだろう。この点についての検討を行いたい。

（2）履修科目データの概要

履修科目構造に関しては、平成6年度の学士課程における開講科目別の履修登録者数を科目区分ごとに集計して分析した。これは、学生が履修し修得した科目の一覧ではなく、あくまでも各科目ごとの登録者数であるため、形式的に他の科目が履修できなかった場合の第2候補などとして登録だけしておき、学期が始まってから実際にはその科目の授業を全く履修をしないなどの例も多く含んでいる。このため、筑波大学の学生の科目履修数が他の大学と比較して多いことは事実であるとしても、ここででてくる数字は表面的な追加数を含んでいる。また、単位については、主に1単位科目から3単位科目まで多様であるが、ここでは機械的に科目数を加算している。

科目区分については、大学教務での区分に応じて、総合科目・体育・外国語・専門語学・国語・情報処理・日本語（留学生等向け）・自由科目・教職科目という学群・学類専門以外の9科目区分と、各学群・学類の専門科目として16科目区分とがある。これらの合計25の科目区分の登録数を学群・学類単位で比較することとする。さらに、加えて注意しておきたいこととして、個人単位ではなく、個々の講義のデータであり、また単年度のデータであるという制約もあるが、このデータを1学年から4年までを累計することで、卒業までの科目区分別の総履修科目パターンを把握しようとしている。

以上のような制約を有してはいるものの、学類までの単位に降りて、その履修カリキュラム構造を把握し、筑波大学における学類や専門学群の特性を相対的に比較するためには格好のデータとなっている。利用の便宜を図っていただいた関係者に感謝したい。

第2節 学群・学類別の科目履修の幅と深さ

(1) 各科目区分別の履修学生の学類別分布

元データとした授業科目別の履修者数には、約 4,300の講義・演習・実験が記録されている。登録者数の延べ数は約 204,000人にのぼる。つまり、1科目平均で50人弱の学生が登録している。

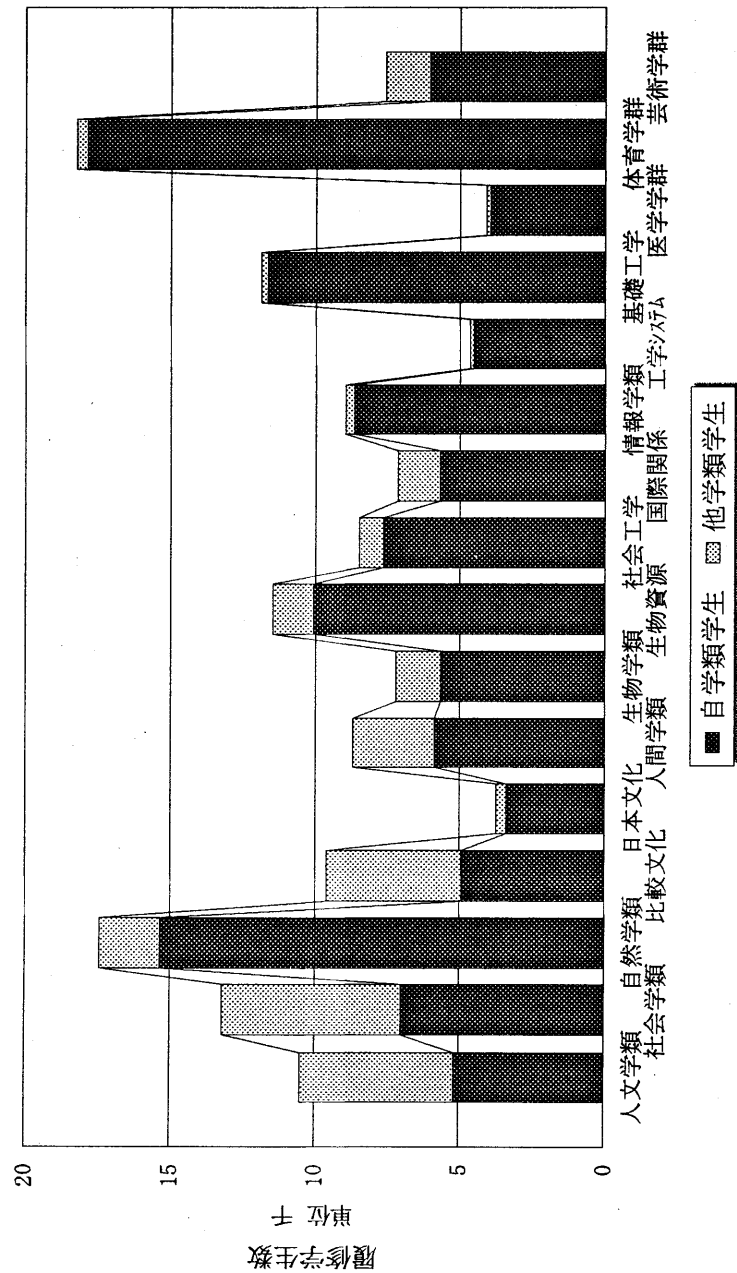
まずこれを、開講される学群・学類別に集計しておくことにしよう。各学類および専門学群単位（以下学類等と略す）で開設されている16の専門科目とその他の全学共通的な6種類の科目区分でみると、体育学群で履修人数×科目数の延べ数が約18,000人でもっとも多く、つづいて外国語の17,000人などとなり、他方で、少ないのは日本語・日本文化学類で延べ 3,700人、医学専門学群で 4,000人、工学システム学類で 4,600人などとなっている。当然のことながら注意しておきたいこととして、これらは、学類等の学生数、講義・実験等の授業形態、単位数別の科目編成、他の共通科目開設等、各学類等に固有の多様な要素が関わっているため、これをもって、学士課程教育にかんする各学類等の貢献度とすることはできない。

むしろ、それぞれの科目における学生層の構成の方に注目したい。図1は、それぞれ開設されている専門科目への履修者数を、それぞれの自学類等の学生と他の学類等の学生とに区別して示した。明らかに顕著な差異があり、人文学類や社会学類、比較文化学類では、他の学類の学生と自学類の学生との割合がほとんど1対1であり、幅広い学生層に専門教育を提供していることがわかる。これに対して、工学システム学類、基礎工学類、医学専門学群、体育専門学群、情報学類、日本語・日本文化学類では、開設される専門科目へ多学類等の登録者がほとんど例外的にしか見られない。

もちろん、これらの学類の教育が全く他の学類等にかかれていないということを主張するものではない。全学的な教育において、一般教育的にこれらの学類等の教育に近接した科目が提供され、それらがこうした専門的な領域での教養教育的な機能を果たしていることは確かである。また、ここにも、他学類等の学生が専門科目を履修する際に、先行する基礎的な知識や学習到達レベルがどの程度要求されるのかなど、それぞれの学類等の専門教育に固有の要素が関わっており、単に他学類への貢献度とか他学類学生にとっての魅力度などといった評価は難しい。

ともあれ、図1の結果を傾向的にみれば、学群別では、第1学群から第2学群、第3学群、専門学群の順で、他の学類学生を専門科目において多く集めており、分野別では文科系的な学類および芸術分野が多く、工学系および医学・体育では自学類等学生の教育がほとんどとなっている。

図1 各学類の専門科目の履修学生分布



（２）各学類学生別の履修科目パターン

つぎに、各学類の所属学生が先の２５科目区分でみてどのような科目を履修しているのか、調べてみよう。表２がその要約表である。いくつかの仮定のもとでの推計であるが、原則的な考え方としては、同表の各セルは、各学類学生が学士課程の４年間で履修登録する科目数の２５科目区分ごとの平均値である。具体的には、各学年ごとに登録科目数を当該学生数で除して、それを４年間分（医学専門学群についても他学類等との比較の都合上、１年～４年までの４年間の履修科目数を用いている）を加算することで、表の数値を算出している。

注意すべき点として、実際のデータは単一年度のものであり、また設置基準の大綱化に関わる制度的に過渡的な時期にあたるため、この時点の４年生が実際にこうしたモデル的な推計値に該当するような履修選択をしているとはいえない。ただし、そうした影響を差し引いても、学類間でどのような科目履修構造の差異－その深さと幅－があるのか、この点に言及するためにはこうして累積して全学年を通してみることの価値が大きいと考えたい。

さて、表２にもどってみると、９つの全学共通的な科目に関しては、履修数に学類等の間で差異は小さいが、芸術専門学群、情報学類、生物資源学類、自然学類等の学生で平均５科目近い履修をしている。この総合科目をこれらの学類等の学生がどうして多く履修しているのか、これは他の全学共通的な科目と比べた場合に結果的に見えてくる特徴なのであるが、体育から教職科目までの科目を専門との関連で特段に履修する必要のない学生がこれらの総合科目をまさしくカリキュラムの幅の広さを確保する意味でより多く履修しているようである。

すなわち、体育科目に関しては、体育専門学群でこの科目履修が専門との関連でほとんど例外的である他は、履修科目数は類似している。外国語については、日本語・日本文化学類、国際学類で１０科目以上の履修をしている。国語は、人文学類学生で６科目以上履修している。情報処理に関しては、すでに専門教育の中にこれらの科目が盛り込まれる社会工学類、情報学類、工学システム学類で、履修数ゼロである。教職科目では体育専門学群で１２科目、人間学類および人文学類で１０科目、人間学類で９科目などが多くなっている。これら平均以上に多く履修する全学的科目は、それぞれの専門教育の枠組みの中で、副専攻にあたるような科目であったり、教職という進路に対応しているということができよう。

それぞれの学類等の専門科目に関しては、自学類等の科目履修数も、人文学類では平均３７科目、日本語・日本文化学類でも３８科目であるのに対して、体育専門学群では７０科目と２倍近い登録数となっている。さらに、情報学類の６８科目、自然学類の６４科目なども自学類科目の履修科目数が多い学類等に数え上げられよう。

それでは、他の学類の専門科目をどの程度履修しているのか、比較してみよう。一人平

表2 学群・学類別の平均登録科目数(全学年合計)

学生数	1 総合科目	2 体育	3 外国語	4 専門語学	5 国語	6 情報処理	7 日本語	8 自由科目	9 教職科目
人文学類	569	3.62	3.21	7.52	0.55	6.34	2.31	0.08	0.36
社会学類	565	3.53	3.06	7.28	0.39	0.72	2.18	0.17	0.49
自然科学類	982	4.56	3.23	5.39	0.00	0.50	2.19	0.08	0.12
比較文化学類	397	3.40	3.90	6.74	0.13	2.15	2.07	0.09	0.07
日本語・日本	354	3.56	4.07	11.64	0.91	0.01	2.12	0.33	0.11
人間学類	544	3.98	3.21	5.34	0.03	2.19	2.18	0.27	0.14
生物学類	376	2.75	3.14	4.54	0.92	0.61	1.99	0.02	0.13
生物資源学類	683	4.73	4.17	6.35	0.06	1.69	2.14	0.03	0.10
社会工学類	548	3.56	4.01	5.79	0.00	1.63	0.00	0.14	0.56
国際関係学類	426	3.57	4.26	10.82	0.34	0.45	2.49	0.70	0.28
情報学類	533	4.67	3.96	6.87	0.96	0.22	0.00	0.03	0.12
工学システム	349	3.49	3.96	5.98	0.22	0.37	0.00	0.08	1.18
基礎工学学類	867	3.77	4.08	5.94	0.16	1.61	2.06	0.15	0.44
医学専門学群	614	3.46	3.19	8.22	0.00	1.35	2.02	0.05	0.03
体育専門学群	1035	3.65	0.14	5.71	0.00	2.05	2.06	0.04	0.03
芸術専門学群	485	4.94	3.14	5.76	0.00	0.83	2.01	0.10	0.17
計	9327	3.99	3.45	6.77	0.25	1.52	1.84	0.14	0.25

	A 人文学類	B 社会学類	C 自然科学類	E 比較文化	J 日本文化	F 人間学類	G 生物学類	H 生物資源
人文学類	37.31	5.37	2.19	5.87	0.40	2.25	0.05	0.11
社会学類	3.60	50.33	0.24	2.27	0.21	1.26	0.02	0.15
自然科学類	2.48	1.49	63.87	1.20	0.08	0.81	1.80	0.59
比較文化学類	4.09	2.45	0.87	50.77	0.27	1.13	0.01	0.24
日本語・日本	1.82	1.24	0.10	4.60	37.80	0.59	0.00	0.03
人間学類	4.83	3.20	0.61	6.52	0.45	44.18	0.11	0.18
生物学類	2.83	1.94	3.18	1.66	0.08	2.76	61.12	6.59
生物資源学類	2.07	3.22	2.41	1.95	0.17	1.43	4.89	59.82
社会工学類	1.25	11.77	1.36	0.87	0.09	0.81	0.24	1.31
国際関係学類	1.39	5.08	0.15	2.32	0.27	0.77	0.03	0.21
情報学類	2.71	3.10	1.48	1.63	0.15	0.33	0.15	0.60
工学システム	0.54	1.44	0.31	0.32	0.09	1.39	0.61	0.31
基礎工学学類	1.43	1.41	1.88	1.52	0.04	1.06	0.47	0.66
医学専門学群	0.17	0.47	0.16	0.16	0.01	1.16	0.18	0.01
体育専門学群	3.93	1.76	0.07	0.25	0.02	2.37	0.05	0.05
芸術専門学群	3.10	1.04	0.19	3.82	0.30	1.70	0.10	0.67
計	4.78	6.01	7.99	4.36	1.70	3.98	3.30	5.26

	K 社会工学	R 国際関係	L 情報学類	S 工学システム	M 基礎工学	T 医学学群	W 体育学群	Y 芸術学群
人文学類	0.06	0.47	0.00	0.00	0.00	0.01	0.06	0.43
社会学類	1.05	3.60	0.04	0.00	0.01	0.00	0.07	0.39
自然科学類	0.06	0.23	0.13	0.05	0.07	0.03	0.07	0.26
比較文化学類	0.11	0.86	0.00	0.00	0.00	0.00	0.10	0.63
日本語・日本	0.03	0.22	0.00	0.00	0.00	0.01	0.05	0.72
人間学類	0.04	0.37	0.03	0.02	0.01	0.21	0.47	0.38
生物学類	0.14	0.22	0.11	0.08	0.05	0.36	0.54	0.80
生物資源学類	1.10	0.58	0.08	0.10	0.15	0.20	0.45	1.04
社会工学類	57.39	3.32	0.43	0.33	0.16	0.01	0.17	3.44
国際関係学類	1.43	54.48	0.01	0.00	0.01	0.05	0.22	0.32
情報学類	1.11	0.08	67.73	0.17	0.04	0.00	0.03	0.37
工学システム	0.30	0.18	1.76	51.94	1.31	0.07	0.02	0.70
基礎工学学類	0.13	0.26	0.16	0.10	54.18	0.09	0.22	1.08
医学専門学群	0.06	0.03	0.00	0.00	0.01	39.09	0.05	0.01
体育専門学群	0.03	0.09	0.00	0.00	0.00	0.00	70.36	0.28
芸術専門学群	0.67	0.13	0.03	0.02	0.01	0.02	0.17	50.27
計	3.89	3.27	4.12	2.13	5.43	1.43	8.33	3.45

注) 学士課程学生の計については、医学専門学群の5・6年(216名)を除外して計を算出。

均で5科目以上特定の学類から履修しているという関係の強い学類を調べていこう。ある学類の学生が、平均的に他の学類科目を平均的に5科目履修登録しているということではなく、特定の学生は10科目以上というケースもあるとおもわれるが、いずれにしてもそうした関係の強い学類は、その学類にとっていわば副専攻的な位置づけが可能であろう。

第1学群の人文・社会・自然についてみると、人文学類の学生は、社会学類科目を5科目、比較文化学類科目を6科目それぞれ平均して履修登録しており、他の学群までわたる幅広いカリキュラム選択を実行している。これに対して、社会学類ではそうした関係はなく、人文学類科目4科目、国際関係学類科目4科目などが「ヨコ」に関連する履修登録のパターンとなっている。自然学類では、そうした他学類等の履修はほとんどみられない。

第2学群の比較文化、日本語・日本文化、人間、生物、生物資源をみると、人間学類で比較文化学類科目を7科目弱、人文学類科目を5科目など他の学群にもわたる幅広い選択をしている。これに対して、生物学類と生物資源学類では、相互に相手の学類の専門科目を履修しているが、それ以外の履修は比較的少ない。

第3学群では、社会工学類で第1学群の社会学類専門科目12科目を履修登録しており、副専攻と呼べる位置にあるのではないだろうか。これと比較すると、国際関係学類では同じく社会学類科目5科目という集中領域もあるが、個人差が大きいのか、比較的他に分散している。情報、工学システムについても特定の学類との関連はみられない。

専門学群については、他の学類科目の中で5科目以上履修するというような学類との関係はみられない。

これらをまとめて、「自学類の専門科目」「総合科目等の非専門科目」「他学類の専門科目」の3種類で、それぞれ学類等の履修登録科目数を比較したものが、図2である。日本語・日本文化のように、総合科目等の全学共通的な科目登録数だけで自学類専門科目の登録数を上回るような幅広い履修をしている学類もあれば、基礎工学類や医学専門学群（1～4年生まで）のように、自学類の専門科目の登録数が全ての科目登録数の3分の2を占める履修科目の集中度の高い学類等もあり、大学の中でのバラエティーが大きいことが明らかとなった。

最後に、幅広い科目履修で特徴的な学類のなかでも、人文学類と社会工学類の科目区分ごとの科目登録数を学年別にみたものが図3である。両者を比較して、人文学類は教職をはじめとする全学的な科目の登録数が多く、また専門科目についても幅広く履修しており特定の副専攻といった位置づけが見られない。もちろん、さらに細かく分類してみれば特定の副専攻構造を指摘することができるかもしれないが、ここでは、この範囲にとどめておきたい。

他方、社会工学類では社会学類科目が副専攻的な位置づけをされており、文科系と理科系とを組み合わせたカリキュラム構造をもっていることがわかる。学年進行と関連させてみることには、上述したように教育課程改革の過渡的段階であり、困難を伴うが、専門科

図2 登録科目数の学群・学類別比較

—全学年合計—

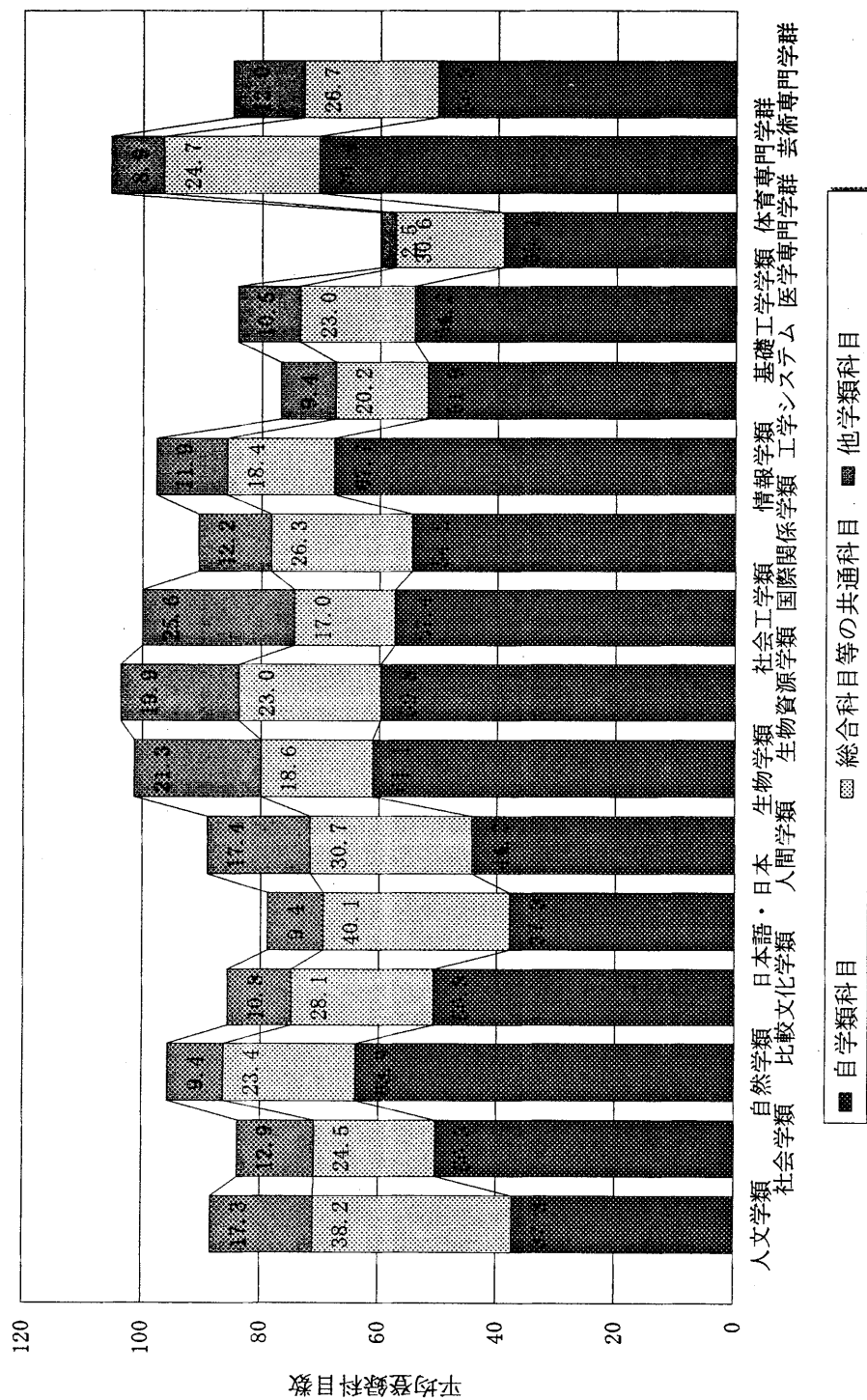


図3-1 人文学類学生の履修構造

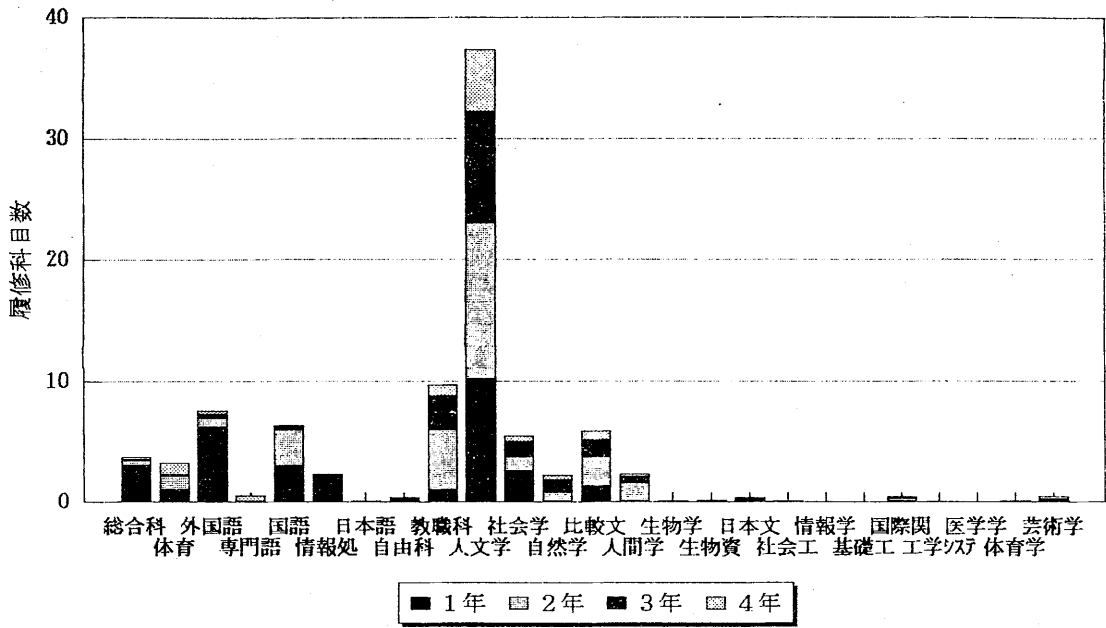
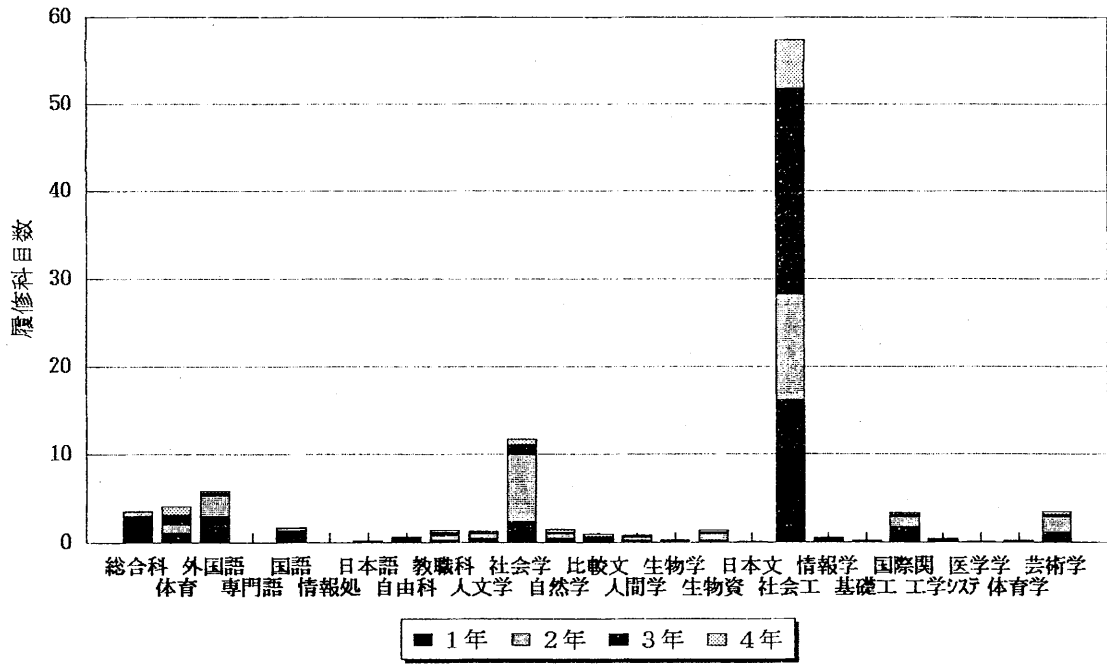


図3-2 社会工学類学生の履修構造



目間の関係に限って注目してみると、社会工学類では1、2年段階では社会学類科目と社会工学類科目を並行して履修しており、3年になると社会工学類へ履修が集中している。すなわち、全体として、いわゆる「くさび形」のカリキュラム構造を構成しているとみることができるのではないだろうか。

これらの学類と比較して、理科系の学類や専門学群など、他の学類の専門科目を相対的にあまり履修しない学類等もある。ただし、これらの学類等の学生が、他の総合大学における学部組織の場合と比べて、どれほど履修カリキュラムの幅が広いのか狭いのか、必ずしも断言することはできない。ただし、医学専門学群などでも平均して少なくとも3科目程度の他学類等の専門科目を履修登録しており、単科大学と比べれば、最低限の幅広さをもっているということは出来るかもしれない。数科目つまり、本章の結果は筑波大学内の科目履修の相互的な関係を明らかにしたものであり、むしろ他の総合大学学部組織を含めた、学際型組織と教養教育カリキュラムを評価する際の暫定的ではあれ座標が設定されたものと考えたい。

第3節 卒業生の進路と学群・学類の特性

学群・学類組織は、前節で履修科目構造を検討してきたことからあきらかなように、特定の学問分野の専門性によって評価されるよりも、むしろそのカリキュラム選択の多様性の保証によって評価されるべきであるかもしれない。しかし、反面では、進学・就職などの卒業生の社会的な活動においてこうした教育組織はどのように機能しているのだろうか。大学院は、基本的により大学教員の学問領域によって組織される傾向をもち、また企業社会では事務系－技術系という分類が、依然として大卒ホワイトカラーの採用や育成における基本的枠組みである。筑波大学の卒業生がこうした点でどのように評価されているのか、それを把握し、他の学部型組織の卒業生と比較することは方法的に困難が大きい。本節では、学群・学類ごとの進路傾向にどれほど共通性と独自性があるのか、その分析はさておき、ひとまずこの点に注目しつつデータを整理しておくこととしたい。

(1) 大学院進学における学群および研究科の対応と多様性

平成5年度の学士課程卒業生で大学院へ進学した者の出身学群・学類と進学先との関連を要約したものが表3である。

大学院進学者の中では、筑波大学修士課程研究科へ57.4%が進学しており、37.9%が博士課程研究科への進学者であり、他の大学大学院への進学者も4.7%ある。学類－研究科の対応をみると、医学、体育、芸術のそれぞれの専門学群では対応する研究科に進学する傾向が強い。また、社会学類からは71.4%が修士社会科学研究科へ、人間学類からは64.0

%が修士教育学研究科へという対応がある。逆に、日本語・日本文化学類では大学院進学者数も少なく、特定の研究科との対応はない。自然学類、生物学類、社会工学類、国際関係学類のそれぞれの学類でも進学者の3分の1を越える数が進学する研究科というものはない。とりわけ国際関係学類の場合には、他大学の大学院進学者が38.5%を占めており、進学における多様性が見られる。

他方、理科系分野でみると、情報学類、基礎工学類ともに、修士課程の理工学研究科と博士課程の工学研究科とを加えれば、その9割以上の進学先大学院が特定されている。

総じて、学部積み上げ型の大学院でないことの特徴は、専門学群や理科系学類よりも文科系学類における幅広い大学院進学傾向などに表れているといっていよう。

(2) 就職先産業の特性

進路からみた学群・学類の特色を、つぎに就職の動向から見ることにしよう。表4は、平成5年度の学士課程卒業者の就職先の産業分野の構成を示したものである。

建設業、製造業でみると、基礎工学類の「建設・製造業」比率は合わせて7割を越えており、工学部からの就職の全国的動向とほとんど同じである。情報学類、生物学類、芸術専門学群、自然学類なども「建設・製造業」就職が半数前後となっている。

第3次産業に目を転じてみると、「金融・保険・不動産業」へ社会学類、社会工学類、国際学類で3割弱の就職者を輩出している。この分野への就職は文科系の中でもっとも大学の銘柄に対応して変化する部分であるが、トップランクの大学の経済学部ではほとんどこの比率が5割近くなる（日本労働研究機構「大卒者調査」より）ことからすると、それほどまでには民間就職市場で筑波大学のこれらの学類卒業者が特段に高く評価されているとはいえないかもしれない。ただし、経済学部などの社会科学分野と比較することが妥当であるのかどうか比較は難しいし、仮にそうした比較で見ても、相対的に高い比率で金融分野に就職していることは確かである。

「教育」への就職者は、人文学類と日本語・日本文化学類、体育専門学群で2～3割となっている。「他のサービス産業」というカテゴリーには情報・ソフト産業などが含まれており、人間学類、芸術専門学群、情報学類で2～3割の就職者となっている。「公務」就職の比率は、農林学類の3割弱を除くと、いずれも1割未満であり、相対的に低い比率である。

すなわち、就職面からみて、理科系の基礎工学類や情報学類は、基本的に他の大学における対応する「学部」の動向とほとんど重なり合っているのに対して、文科系的学類では進路の多様化がみられ、今後これらの学群・学類構造に独特の進路構造を検討することが可能であろう。

表3 学士課程卒業者の進学先大学院

出身学類	進学先	筑波大学（修士課程）								
		地域研究	教育	経営政策	バイオ	理工学	環境	医科学	体育	芸術
1 人文		15.8	57.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.3	0.0
1 社会		0.0	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
1 自然		0.0	10.0	0.8	0.0	32.5	4.2	0.0	0.0	0.0
2 比較文化		27.3	36.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	0.0
2 日本語日本文化		14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	0.0	0.0	0.0
2 人間		0.0	64.0	8.0	0.0	0.0	4.0	0.0	0.0	0.0
2 生物		0.0	8.8	0.0	19.3	0.0	14.0	0.0	1.8	0.0
2 農林		0.0	2.8	0.0	16.9	0.0	31.0	1.4	0.0	1.4
3 社会工学		0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0
3 国際関係		23.1	0.0	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	7.7	0.0
3 情報		0.0	1.5	0.0	0.0	56.1	0.0	0.0	0.0	0.0
3 基礎工学		0.0	0.0	0.0	0.0	55.6	0.0	0.0	0.0	0.0
医学専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
体育専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	88.6	0.0
芸術専門		0.0	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	89.3
計		1.6	8.8	1.6	3.7	22.9	7.3	0.3	7.0	4.2

出身学類	進学先	筑波大学（博士課程）									
		哲学思想	歴史	文芸言語	教育学	心理学	心身障害	社会科学	社会工学	国際政経	生物
1 人文		5.3	5.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
1 社会		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	71.4	0.0	0.0	0.0
1 自然		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 比較文化		9.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 日本語日本文化		0.0	14.3	28.6	28.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 人間		0.0	0.0	0.0	4.0	4.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 生物		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3
2 農林		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	1.4
3 社会工学		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	4.2
3 国際関係		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
3 情報		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
3 基礎工学		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
医学専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
体育専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
芸術専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
計		0.3	0.3	0.3	0.5	0.2	0.2	0.8	1.3	0.6	3.2

出身学類	進学先	筑波大学（博士課程：統）										他大学 大学院	合計
		農学	数学	物理学	化学	地球	工学	医学	体育科学	芸術学	小計		
1 人文		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.5	10.5	19
1 社会		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	71.4	14.3	7
1 自然		0.0	8.3	20.8	6.7	11.7	0.8	0.0	0.0	0.0	48.3	4.2	120
2 比較文化		0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	0.0	18.2	9.1	11
2 日本語日本文化		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	71.4	0.0	7
2 人間		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.0	12.0	25
2 生物		8.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.3	0.0	0.0	54.4	1.8	57
2 農林		43.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	46.5	0.0	71
3 社会工学		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	37.5	4.2	24
3 国際関係		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.1	38.5	13
3 情報		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.8	0.0	0.0	0.0	34.8	7.6	66
3 基礎工学		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	43.6	0.0	0.0	0.0	43.6	0.9	117
医学専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	75.0	0.0	0.0	75.0	25.0	8
体育専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.5	0.0	4.5	4.5	44
芸術専門		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	3.6	0.0	28
計		6.0	1.6	4.1	1.3	2.4	12.2	2.1	0.3	0.2	37.9	4.7	617

第4節 まとめ

本章では、履修科目構造、進路動向から、筑波大学の学群・学類構造の特色の把握を試みた。簡単にこれまでの結果を仮説的な考察もふまえて振り返ると、第1に、芸術系を除く専門学群、理科系学類においては、他学類等との履修の相互の乗り入れの少なさ、特定進路への集中傾向など、伝統的な学部特性に近いものが見られる。芸術専門学群は、他の医学・体育と比較して専門科目において多様な学生層の教育を担当しており、学群制という組織の利点が適切に生かされていると思われる。

第2に、文科系学類では、人文系において他大学よりも幅広い科目履修がなされ、かつ他学類等の学生を幅広く教育している。

第3に、社会科学系でも、幅広い履修パターンと大学院進学や就職などの進路の多様化とが見られる。とくに社会工学類で、とりわけ主専攻－副専攻型のカリキュラム構造が、学群・学類構造と関連して可能となっているように見える。また、国際関係学類では他大学大学院進学傾向がみられ、筑波大学大学院の側から見ると問題もあるかもしれないが、多様な人材を輩出している結果を読みとることができよう。

第4に、学群間でみると、人文・社会・自然という伝統的な文理大学型の学類が、他学類等の教育への貢献も高く、またそれぞれの学生が他学類等の履修をすることも多く、学群制組織が有効に作用していると思われる。

いずれにしても、本章はそれらを評価するには資料的に限られており、むしろ今後筑波大学および他の学部教育を評価するための仮設的な座標を検討したものである。

表4 学士課程卒業者の就職先産業

産業	建設業	製造業	卸小売	金融 保険 不動産	運輸 通信 電気 ガス	教育	医療 法務 宗教 非営利	他の サービス	公務	農林業 鉱業 分類不能	計
学群・学類											
1人文	1.2	24.4	11.6	7.0	5.8	27.9	2.3	10.5	8.1	1.2	86
1社会	4.9	16.7	12.7	29.4	8.8	1.0	3.9	10.8	11.8	0.0	102
1自然	0.0	40.0	1.2	5.9	4.7	17.6	2.4	21.2	4.7	2.4	85
2比較文化	1.6	23.8	15.9	9.5	9.5	14.3	3.2	15.9	4.8	1.6	63
2日本語・日本文化	1.6	21.0	19.4	11.3	4.8	24.2	1.6	8.1	3.2	4.8	62
2人間	0.0	19.5	13.4	7.3	0.0	17.1	1.2	29.3	9.8	2.4	82
2生物	4.3	47.8	4.3	4.3	0.0	13.0	4.3	17.4	4.3	0.0	23
2農林	4.2	29.2	9.7	6.9	1.4	2.8	2.8	11.1	27.8	4.2	72
3社会工	8.1	20.2	5.1	28.3	15.2	0.0	1.0	13.1	9.1	0.0	99
3国際	4.2	20.8	13.9	26.4	5.6	6.9	4.2	12.5	5.6	0.0	72
3情報	0.0	55.7	8.6	4.3	5.7	0.0	1.4	24.3	0.0	0.0	70
3基礎工	10.1	63.3	2.5	2.5	8.9	0.0	0.0	7.6	5.1	0.0	79
5体育計	1.8	11.4	12.6	13.8	6.0	31.7	1.8	14.4	6.0	0.6	167
6芸術計	10.5	40.4	5.3	0.0	0.0	8.8	1.8	26.3	5.3	1.8	57

注) 医学専門学群を除く